

800 円

今回は、聖イグナチオの「霊操」をヒントに、教会共同体における、共に善を行おうとする人間同志の人間関係をどうとりあつかうかを「識別と選択」という観点から考えます。

第 1 章 キリスト者の疲れ

1. キリスト者同志の人間関係

日本の教会は、規模は小さなものですが豊かな賜物や熱意を持った人たちがいて、潜在的にかなりの力を持っていますが、その力が十分に発揮されていないように感じます。その原因は、資金や人材不足ではなく、大体教会内の人間関係ではないでしょうか。それも小さなきしみで、錆ついた自転車のペダルのように重くなって、楽しくなくなる。最初に期待したほどには発展しない、ということが繰り返されているような気がします。

2. 「愛」だけでは疲弊する

きしみの原因は「愛」の不足でしょうか？ 確かにそうでしょう。しかし、「愛」というものは、自分で足りないことが分かっているのに、今すぐ思い通りに増やせるものではありません。自分では一生懸命やっているつもりでも批判を受ける。「なぜ？」と腹が立ちつつも「愛」が必要だからと、我慢を続けるうちにだんだんと疲れてきて、一区切りしたら今度は身を引こう、という態度をとりがちです。真面目なキリスト者は、信者同士で難しい関係に陥った場合、もっと愛をもって、もっと祈りを込めて接すれば必ず自体は打開できるはずだと考えがちです。しかし、現実、多くの善意の人たちが行き詰まり、自分自身の至らなさに失望していくのです。

3. 識別と選択

「愛と祈り」だけでは打開できないとすれば、他に必要なものは何でしょう。それは「識別と選択」です。「愛」の不足を認めるとしても「何に対して」もっと愛をもって行うのか考えなくてはなりません。既定の路線に縛られず、進む方向そのものを識別し、しっかりと選択することが必要な場合もあるはずです。

各自、これまでの自分に経験がなかったか振り返って下さい

Q. 折角勇んで参加したグループで居心地が悪くなって、何となく消えていったことはありませんでしたか？

Q. 人の言動に対して意見や苦情があるとき、それをはっきりと言えなかった(遠慮というよりも期待薄だから・・・自分が我慢しようという態度で)ことはありませんか？

Q.自分への批判的意見に、耳を傾け過ぎて(毒舌までも受けてしまう)、かえって自分のやる気や創造力を失っていませんか？

Q.会議中に「ここで言うか言わないか？」「強く主張すべきかどうか？」で判断ミスをして無用な反発を引き起こしてしまったことはありませんか？

Q.ある人にグループから退去してもらうかどうかの判断に際して「愛」を掲げる教会としては、はっきりした態度が取れず悩み続けたことはありませんか？

4. 教会の疲弊

このような場面で、しっかりとした識別と選択をせず、あいまいな気持ちのままで行動してしまうとやがて疲労困憊してしまいます。信者たちの心の疲れが教会を弱めてしまいます。一方が真の理由を明かさず黙って後方に退いてしまいますから、目立ちません。グループとしては存続して活動しても、トラブルの記憶は関係した人たちの心に残り、一人ひとりの活動のエネルギーをそぎ続けます。このような疲弊を防止できれば、この何十年の教会の歩みは、もっと進歩していたのではないのでしょうか？ そのような損失、疲弊を少しでも防ぐことを考えましょう。

「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」(マタイ 10 : 16)

第2章 自分が選択する

1. 「識別」と「選択」

わたしたちは、「識別」と「選択」をあまり区別せずに使っているようです。何かを決めたときに「わたしはこう識別しました」というべきではなく、「識別の努力をした後、わたしはこれを選択しました」と言うべきです。

「わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」(ルカ 22 : 42)の聖句との関係はどうでしょう？ 「わたしの願いではなく」というのは「自分は選択しない」という意味ではありません。自分で識別し「これが神の御心に沿う」と選択するのです。イエスも、ゲッセマネの園で、血の汗が滴り落ちるほどの祈りを捧げましたが(ルカ 22 : 44)、御心がどこにあるかを判断した後、エルサレムを離れて別の地域で宣教するなどの選択肢を捨てて、甘んじて逮捕される道を選択されたのです。「わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」という祈りは、「識別を助けてください」、という祈りで、「何も選択しない」という意味ではありません。人間関係で悩む場合、成り行きに任せるのではなく「自分が選択するのだ」という意識をしっかりと持たなければなりません。

迷っている人が一番聞きたいのは「正しい道」を識別する方法でしょう。しかし、まず「選択するのは自分」という気概を持たないと、いろいろな識別の話聞いてもあまり役に立たないでしょう。間違えることばかりが心配になると、ついずるずると結論を後回しにしてより大きな害を引き起こし

ます。

人間とは、完全には明快になり得ない状況の中で、自分の自由と責任において行動する存在です。神も、そのようなものとして人間を創造され、そこに人間の尊厳もあります。神の光を求めて、真剣に識別の努力をすることが求められます。特に、自分では決めにくい日本人にとっては難しい注文かもしれませんが、最終的に選択するのは自分だという意識が大切です。

2. 選択すると、実行できる

腰を据えて、目標に向けてひた走るには「自分がこう決めた」という自覚が必要なエネルギーを与えてくれます。「身を引かざるを得ない状況に追い込まれた」という受け身からの結論ではなく「自分が離れることを選択した」という自発的態度は、その後の行動にも選択肢ができます。「これから自分は、誰とどう神の国の建設に関わるか？」と考えることができます。環境に流された結論は、これからの生き方も中途半端になりがちです。人間に間違いはつきものなので、選択が結果的に誤りだったということもあるでしょう。決断し実行してこそ、間違いも分かります。「ああ、あの時、わたしはここで間違っただ」という反省もできます。誤りに早く気づき、方向転換できることに人間の尊さがあり、神はわたしたちの回心を喜んで迎えてくださいます。

イエスの受難予告に際して、ペトロはイエスを脇にお連れして一言申し上げています。(マタイ 16:21~23) 他の弟子たちは、何かありそうだと感じつつも黙っていましたが、ペトロは積極的に発言したおかげで叱られる、という得難い体験をし、後に使徒の頭となっても、その体験を体に刻みつけていたでしょう。

3. 決定後の祈り

間違いが分かるためには、選択し、実行した後、その結果を神のみ前で祈ることが必要です。神からの「示し」を待つのです。決断する前だけでなく、決断を神にささげ、祝福と励ましを願い、その後の経過を神様に報告するのです。神様抜きで一人で進もうとはしないことです。状況がうまく進んでもいなくても、神様との共同作業だという意識で進めましょう。そうできれば、軌道を修正するにも時期を逸することも避けられます。また、次の識別の際にも体験を活かすことができます。やがて、識別の精度は上がってくるでしょう。キリスト者は、生涯にわたって何かを識別し続けます。一つ一つのことで一喜一憂するのではなく、長いスパンで考えましょう。

第3章 識別のために考えておくべきこと

識別のために、今の自分の出来る努力を最大限にしなければなりません。その助けになることを考えましょう。

1. 「神の国」という視点に立つ

第1章で列記した(P2の5つの質問)ように、わたしたちは堂々巡りをします。「周囲に波風立てず、人に嫌な思いをさせず、他人から悪く言われない方法はないか？」と欲張りなことを考えている。「事態が紛糾しているのではなく、欲望が事態を紛糾させている」という言葉もあります。自分をあらゆる非難から守りたい欲望・衝動から自由になることが大切です。よい選択をするには、

大きな視点、聖書に基づく「神の国」という視野は助けになります。

「神の国」は、その完全な実現は、来るべき終わりの日までまたなければなりません。今現在、この地上でさらに進展しつつあるプロセスでもあります。弱い人間には、一進一退があっても神様はご自分の計画された「神の国」の実現のために心を砕き、自らも働いておられる。このような信仰が、わたしたちにはあります。自分の小さな人生をこの視野・信仰の中に置くことで「周囲に波風を立てる」「人に嫌な思いをさせる」ことへの過度の恐れやこだわりから自由になれます。恐れが小さくなれば、選択(決断)しやすくなります。

2. 「神の国」は動いている現実である

「神の国」は、キリスト者にとって、抽象的な理念やスローガンではありません。イエスによって始められ、今ここに存在し、完成に向かって動いている「現実」です。いかに複雑な状況にあっても、神様が働かれ、「神の国」の実現に向けて少しずつ動いている。このような見方が、時に荷を軽くします。今の自分の困難が、ただ不毛なものなのか？ 「神の国」の実現という大きな目的に一役買っているのか？ そのような視点は、複雑に絡まったがために見失った本質にもう一度気付かせてくれます。

3. 理想か現実か、ではない

人間関係の対処で本当に迷った時は、無意識の思い込みから一度自由になることが必要です。自分の・思考・行動パターンをよく見るのが大切です。案外と、他の人に聞いたら当たり前と思っていたことがそうでないこともあります。また、自分では「こうすべきだ」というキリスト者としての正しい選択(理想)を持ちながら、それを断行できなかった自分を妥協と捉えてしまうこともあります。このように「あるべき自分」を価値基準にすると辛くなるので「現在の自分」に神が求めていることは何か？という視点から識別しましょう。「将来の自分に限界をおいてはならないが、現在の自分には限界があることを知らなければならない」という言葉があります。「理想を貫くか、現実妥協するか」という二者択一ではなく、本当の「現実」からスタートすることを心がけましょう。

4. 自分の内面だけにこだわってはいけない

思い悩む原因は、自分の内面・心のあり方にこだわっているケースもあります。自分の心が清いかどうかだけではなく、現実的な目で見える利益にも目を向けることが必要です。ボランティア活動をする場合に、動機の純粋さを内省し「偽善者になりたくない」と何もしなくなることが果たして正しいでしょうか？ たとえ純粋ではなくても、行動の効果があります。内面を重視するために、相手の人が不自由あるいは傷つくことは避けなければなりません。現実的な効果をもっと重視するたくましがキリスト者には必要です。

5. 「神の業」という言葉

私たちは自然と「愛」「謙遜」という言葉から自分の内面を問題にしがちですが、この傾向を正すために、聖書に基づいた「神の業」という言葉を使うことが有効です。見える現実、自分の行動がもたらす結果に目を向けやすくなります。人間関係の対処に当たってもこの言葉で考えてください。

この苦情を彼に言うことによって何が起きるだろうか？ 「神の業」が行われるだろうか？ このように考えてみると、どちらの道を取るべきかがはっきりしてくるのではないのでしょうか。

また、様々な活動の中には、わたしたちの感受性が反発することもあります。その運動の価値と直接関係のない場合もあります。他人のちょっとした欠点を活動の反対理由にあげないように注意したいものです。この判断ミスを防ぐためにも「神の業」という言葉が有効です。「**一緒にはできないけれど、協力できることはしていこう**」という答えに行きつくこともあります。

イエスも次のように語られました。

もし、私が父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。（ヨハネ 10：37～38）

6. 独創性

「辞めるか、辞めないか」「言うか、言わないか」というように、**二者択一で考えると、重苦しい気持ちになってしまいます。しかし、他に選択肢があるかもしれません。**

今はもうない話かもしれませんが、お姑さんが財布と家事を独占して、お嫁さんに渡そうとしないケースを考えましょう。お嫁さんの取る道は「お母様、わたしにさせてください」か「いじけて引っ込む」かのどちらかになりがちです。しかし、何もさせてもらえないお姑さんに「お母様、ありがとうございます。わたしは奉仕活動に精を出します」と元気に言ってみたらどうでしょう？「**あれか、これか**」で煮詰まったら、他に選択肢がないか模索する「独創性」という言葉を思い出しましょう。

独創性を育てるには、

- 1) 遊び心—「こうしたらあの人はどうするか？」と反応を楽しみにする心
- 2) 勇気—思いついたことを実行する勇気
- 3) 堅実な実務(努力)—実行したことをやり遂げる努力
- 4) 謙遜な心—失敗しても腐らない。「これはやっぱり駄目だったね。今度はこうやってみよう」という態度。軽やかさはキリスト者の特徴であるはずです。

第4章 霊の動きの識別（理論）

識別のための具体的方法としては、「**霊の動きの識別**」というものがあります。役立てるには訓練が必要ですが「ものの見方」として理解するだけでもある程度は参考になります。

1. 発想の転換

「どちらが正しいのか？」と考えて堂々巡りになったとき「**霊の動きの識別（以後 霊動識別）**」という方法をとります

霊動識別の根本的な知恵は「こうしよう」という考え方が自分の中に起こったときその「源」を識別するということです。例えば、「このグループを退会しよう」という考えが起きたとします。このとき、**この考えは悪い源から来たのか、善い源から来たのか？ 悪い源からのものならそれを退け、善い源からのものならばそれに従うのです。**逆に「このグループに留まっていよう」という考えが起こったら、それはどこから来たのか、その源を識別するのです。また、その考えはそも

そも自分独自のものなのか、他人の後押しによるものなのかもよく見なければいけません。胡散臭さ、党利党略が絡んだ声であれば従ってはいけません。

具体例ー修道者になるかどうか？

その理由ー教会の皆が勧めるから、親が勧めるから、自分の適性が生かせそうだから、心からの望みだから、神様から呼ばれていると感じるから、イエスの十字架を共に担いたいから・・・

2. 霊とは「他者」である

「源」とは、「隠れた動機」や「深層心理」ではありません。「彼に苦情があるが、ここでは言わないでおこう」という気持ちがあるとします。それは、相手を寛大に見守ろうとする善意から発しているか、それとも自分が悪く思われたくない臆病さからきているのか。あるいは、子ども時代の何かトラウマがあるのか。それをあれこれ反省するのが霊動識別ではありません。このような自己分析は、無益ではありませんが、今ここでの選択のためにはあまり役には立ちません。霊動識別とは、自分自身の霊のひそかな動きだけではなく、さらにその奥で働いている「他者」である霊の動きをも識別することです。これからの説明は、善い霊と悪い霊を対比させて行います。中には、悪霊の存在を否定する人もいますが、人間世界にそれらが影響を与えていることを前提とします。

3. 悪霊は存在するのか？

悪霊というと、人間にとりつき奇怪な行動を取らせる存在をイメージするかもしれません。しかし、ここで問題とするのはそういうものが実在するかしないかの話ではありません。個々の人間ではなく「神の国」の実現を阻む力のようなものです。善を行おうとする人たちの間にすりりと入って来て、気付かれないうちに心変わりや減退感を与えるものです。

悪霊は、物理的な力ではなく、持続的な意図と巧妙な策略を持っている「もの」です。神に反対する者ですが、神を滅ぼすことはできませんから、「神の国」の進展を妨害することを目的にしています。悪霊は、よき活動を妨害し、挫折させようとその機会を虎視眈々と狙っています。過去を振り返ってみると、とん挫したり仲たがいのグループには、関わった人たちの弱点が見事なタイミングで組み合わさったと理解できませんか？ そういった体験は、巧妙な手段で神の国の実現を阻む活動があったと考える方が理屈にあっていると考えられませんか？

4. 悪霊は策略を持っている

自然災害には、意図はありません。しかし、悪霊は、わたしたち一人一人の弱点がどこにあるかをよく知っていて、そこをうまく突いて来ます。挫折というほどではないが、本当はもっと豊かな実りをもたらすはずだったものが細々と続くだけになっていることがあります。これも悪霊の仕業だと考えられないでしょうか？ 大きな失敗よりも、こまめに妨害して進展を阻止するのが悪霊のやりくちです。本当はこちらの方が、深刻かもしれません。

悪魔の策略に関しては、C.S.ルイスの『悪魔の手紙』（新教出版社）が大変参考になります。地獄にある誘惑研究所の所長である大物悪魔スクルーテープが、人間社会に誘惑の実習に出ている若い悪魔ワームウッドに送る指導の手紙という体裁で書かれています。もちろん創作ですが、悪魔の戦略とはどういうものかについて生き生きとしたイメージを与えてくれます。

5. 自分の弱点と悪霊

「自分の弱点」と「悪霊の働きかけ」は区別しなければなりません。欠点そのものは邪悪ではありません。しかし、悪霊がこの弱点を利用して悪事を働こうとするとき、問題は深刻になります。悪事とは、その人自身の信仰生活をむなしいものにすること。それを通して教会共同体を弱めることです。わたしたちは、自分の弱点に対して柔和でなければなりません。性急に力づくで改善しようとするのではなく、気長に構えるのです。弱点のある隣人に柔和でなくてはならないのなら、自分に対してもそうあるべきです。人にしてあげたいことは、自分にもそうするべきだからです。しかし、自分の弱点を利用して神の国に害を与えようとする悪霊の力には断固戦わなければなりません。「悪霊から来た」と思われる考えはすっぱり退けなければなりません。

6. 悪霊なら仮借なく戦える

悪霊とは、人間とは別の存在ではなく、人間自身の内部の暗い部分だという人がいますが、それは聖書的な見方ではありません。聖書では、悪霊とは縛り上げ、追い出すべき存在です。「まず強い人を縛りあげなければ」(マタイ 12:29)とイエスが言われているのは悪霊のことです。悪霊は、自分自身の一部ではなく、「神の国・神の業」を侵略する者です。単に自分の道を誤らせるにとどまらず、「教会・神の国」全体を妨害しようとしています。容赦なく、決然とした態度で戦わなくてはなりません。

7. うわさ、批評

人のすることは気になるものです。直接は関係がなくても、人や運動にどういう態度を取るかも「神の国」と関わりのあることです。

第5章 霊の動きの識別（実践）

1. 霊の動きを識別する

霊動識別とは、頭で道徳的に善悪を判断するものではありません。今「これを言いたい」というような衝動の奥にどちらの霊が働いているかを識別するのです。悪霊の働きを微妙に感じ取ったらそれを避け、善霊の後押しがあれば断行することです。自分の今の思いはどちらの霊がサポーターかを見分けるのです。

2. 霊動識別の対象

識別の対象となるのは「ある行動を実際に起こそうとする心の動き」です。ただ、ぼんやり迷っているだけのときは、まだ霊動識別はしにくいものです。いざ、一つの方向へと具体的に心が動いたときに、霊動識別のプロセスが始まります。その心の動きがどちらの霊から来ているか、あるいは後押しされているかを識別するのです。

3. 感情の味わい

識別は「感情の味わい」によって行います。いろいろな事情があって『この活動から離れる』ときに、大体ある感情が含まれています。その感情の味を「味わい分ける」のです。悪霊からの味がするか、善霊からの味がするか、どちらでもないか。

見知らぬ営業マンに商品を勧められたとき、その話が信用できるかどうかは、名刺や紹介状など

の道具ではなく、その人の雰囲気や直観的に判断するようなものです。理屈抜きにこの人は怪しい、信用できると判断するように、**その時々「感情」を味わい、霊の善悪を見抜くのです。**

しかし、理屈抜きと言っても、先ほどの営業マンなら「目を合わせない」「契約を急ごうとする」といった場合、信用できるか否かを経験から判断できるポイントもあります。これから、いくつかの見分けるポイントについて考えます。

4. 悪霊が自分を動かしている場合

一般的に「**荒み（すさみ）**」という言葉で表現されます。「暗い、孤独な、行き詰まった」ような感じです。このような感じが強く伴っている場合は、悪霊の促しである可能性が高いです。経験を積むと自分なりの表現もできるようになります。もう少し詳しく具体的な兆候を挙げてみましょう。

- ①自分の行動に対して、周囲の人の同情や理解を求めたい気持ちが強い。
 - ②思わせぶりの気取りがある。自分の行動に実際以上の深い背景や理由があるように思われたい。
 - ③物事を秘密にしようとしている。人に知られることを望まない。
 - ④自分のしようとしていることは理屈にあっているという感じが強い。
 - ⑤他人について、勝手に悪い想像をして暗くなってしまう。つまり、相手が実際に言ってもいないことを想像の中で言わせて、それでさらに腹を立て反撃のようなことをしてしまう。悪霊は、想像力を悪用することが多いように思われます。

5. 善霊が自分を動かしている場合

一般的に「**慰め**」という言葉で表現されます。「平和、喜び、希望、穏やかさ」などで表現されます。具体的には次のようなものです。

- ①一人で穏やかに立っていることができる。
 - ②素直になれる。
 - ③人に知られても構わない。（知らせたい、とは違います）
 - ④現実の上に立っている。悪い方へ想像が勝手に走らない。
 - ⑤「窓が開いて、風が抜けている」ような感覚がある。

善霊の働きは、単純率直なので、あまり言うべきことはありません。悪霊は、いろいろ画策するので、ある意味で手掛かりが豊富です。**初心者は、悪霊を見分ける方から始める**といいでしょう。

6. どちらでもない場合

霊動識別をしたが、悪霊も善霊も特に関わっていないらしいと分かる場合があります。このような場合、客観的に利害得失を比較して決めます。もちろん「**神の国**」の利害を考えるのです。判断を「**善悪**」ではなく「**高低**」の問題に切り替えます。疲労困憊になることを避けて次の機会に自分の力を温存することも「神の国」の利益の一つです。いつまでもぐずぐず迷うよりは、どちらかをさっさと選び実績を積む方が得策です。

7. 感覚を訓練する

善霊と悪霊を見分けるポイントをいくつか挙げましたが、**同じ言葉で両方の特徴を表現すること**

もあり、微妙なケースも少なくありません。例えば、「周囲の人の理解を求めたい気持ち」は、やみくもに誰でもいから賛同者が得たい場合は悪霊の兆候です。しかし、信頼できる人がいて、その人に分かって欲しいという気持ちなら必ずしもそうではありません。

また、「自分一人でやるしかない」という思いは、善霊に導かれた自立心の場合と、孤立無援の中で絶望に至る可能性もあります。両者をよく識別するには、やはり感覚そのものを磨く必要があります。その手段をいくつか挙げておきます。

8. 過去の経験

窓が閉まってもエアコンが入っていれば、それなりに快適です。もし、一度も窓を開けたことがなければ、実際に窓は閉まっているのに、自然の風が通っていると誤解してしまうかもしれません。しかし、自然の風を体で感じた経験があれば、今は窓が開いているか閉まっているか目を閉じていても感じ取ることができます。このように過去の選択の中で、「あれは確かに善霊の働きだった」と確信できる経験を思い出して下さい。その時の感情を味わってみると、今働いているのが悪霊かどうかを識別する助けになります。

9. 日々の練習（事後の識別）

寝る前に、その日に気になる行動を一つ（厳しく苦情を言った、あるいは言いたいのを抑え込んだ）取り上げて下さい。しかし、道徳的にあるいは理論的に判断しないでください。熟慮した冷静な行動だけが良いではありません。瞬発的な勢いでしたことが良い選択である場合もあります。重要なのは、その時に起こった感情です。それをもう一度呼び起こし味わってください。そして、それからそれは善い霊の促しだったのか、悪い霊の促しだったのか、感情の味わいで判定してみてください。同じ「怒り」という言葉でも、味わいが違うことが分かるでしょう。実際の現場では、瞬時に判断し行動しなければならないことが多いのでいちいち感情を味わうことはできません。しかし、ある程度時間が経ってその場のプレッシャーから解放されたら、識別しやすくなります。その、体験を積むと次第に現場でも判定ができるようになります。瞬時の判断をより確かなものとするために「寝る前の祈り」をする習慣のある方は、一日の振り返りの中にこの訓練を取り入れたらいかがでしょう（意識の究明）。

10. やってみよう

霊動識別の訓練や基礎づくりには時間がかかります。また、上達に限りはありません。しかし、「難しそうだ」としり込みしないでください。はじめは明確な結果を得ることができなくても、試すうちに感覚がつかめてきます。また、識別をしようと覚悟を決めた人から悪霊は遠ざかるでしょう。いつまでも、そのような姿勢を持たない人には面白がって近づいて来るでしょう。繁華街を歩いているとき、目的を持っていたら声を掛けられにくいですが、何の気なしに歩いていると声を掛けられます。悪霊の働きを識別できるよりも、そもそも近づけないのが一番よいのです。

参考文献 イエズス会員が「霊の動きに識別」について分かりやすく解説した本

英隆一郎著 『道しるべ』（新世社） 第12話から第21話 900円＋税

イシドロ・リバス著 『二人の自分一心の動きを見つめて』（女子パウロ会） 500円＋税

第6章 神のあわれみ

1. 「神の国」において

霊動識別は、かなり具体的な方法なので、これをしっかり習得すればいつでも正しく識別できると思われるかもしれませんが。しかし、土台人間がすることなので 100%正しく識別はできません。その時の自分で判断するしかないため、当然誤りが含まれます。

「取り返しのつかないこともあるのではないか？」とわたしたちは恐れます。しかし、たとえ誤った判断によって人を傷つけることがあったとしても、**「神の国」のためを思ってしたことが、人を傷つけたままで終わるでしょうか？**

わたしたちは、自分を神のあわれみに委ねることを忘れてはなりません。いつまでも、自分の手の中に責任を握り続けることは神のみ旨ではありません。現在の自分の精一杯の見識と判断であれば、それを力強く実行し、後は神に委ねる。それしかありません。「神の国」の到来のときに、その誤りはキリスト自身によって告げられますが、それもただ責めるようなものではないはずです。**主の前に首を垂れて、心からの神のあわれみを願いましょう**。「神の国」では、取り返しのつかないことはない信じましょう。

2. 間違っているかもしれない

自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。

わたしを裁くのは主なのです。ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。(I コリ 4:4~5)

今の自分と意見を異にしている相手が正しいかもしれない、とはなかなかわたしたちは思えません。「彼にも一理ある」ことを認めるまでなかなかできません。**根本的なところでは自分が正しいという立場からなかなか離れられません**。一瞬でも「相手の方が正しいかもしれない」と思うことができれば、今の現実が新しい光のもとに見えるかもしれません。

現実を調べ、祈り、精一杯の見識で識別し、選んだことを確信をもって行う。それでありながら、**反対意見に理があるかもしれないという意識を秘めている**。このような人こそ、まことに謙遜で柔和な人と言えるでしょう。その人は、真のキリスト者の香りを放ち、周囲に良い影響を与えるでしょう。